

消えていく日本の モダニズム建築を 記録する

建築写真家

山田 新治郎



Shinjiro Yamada

近年の日本の モダニズム建築の状況

ここ数年、日本でも一九六〇年代頃から建てられたモダニズム建築が、老朽化や再開発などを理由に解体されている。

近年解体された著名な建築物としては、海外メディアなどにも多く取り上げられた中銀カプセルタワービル（一九七二年、

設計・黒川紀章）や都城市民会館（一九六六年、設計・菊竹清訓）がある。都城市民会館は一六年前に解体問題が浮上したものの市民運動により解体を逃れたが、その決定から一二年後に再度解体問題が浮上し、建築関連団体などの保存活動も実らず二〇一九年に解体された。現在も香川県立体育館（一九六四年、設計・丹下健三）、羽島市役所（一九五九年、設



昨年、惜しくも解体された中銀カプセルタワービル。海外メディアからの取材も多く、カプセルの今後の活用にも興味が広がっている。

計・坂倉準三）など、閉鎖された建物の今後が危ぶまれているものも多い。一方、国立代々木競技場（一九六四年、設計・丹下健三）や日本武道館（一九六四年、設計・山田守）などのように大改修工事を経て残り続けていくものもある。多くのその時代の建物が存続の分岐点に来ている。

日本では、戦争被害や自然災害

で建物の倒壊・建て替えを繰り返したことにより、独自の建築の発展が進んだ経緯もあると思う。それを文化と考え、新たに建て替え、造られていくことは必然的なことだろう。モダニズム建築が造られた時代には盛んに施工記録映画などの記録が作られたが、解体や改修の時はどうだろうか。

モダニズム建築の 今を写真で伝える

私は写真家として三〇年ほど、竣工写真を中心に建築物ができていく場面から終焉の消えていく風景まで、いろいろな表情を撮影している。本誌の表紙の建築写真を担当しているが、明治・大正・昭和初期の

建物のなかには、現在では記念館などとして保存されているものも多い。そのようにして残るのはその時代のなかでも一部の建物であり、今後、同様な形で残っていくモダニズム建築は稀だろう。

今後も取り壊される建物が増えていくなかで、供用中には見えていなかった構造部分や基礎などを解体中に記録し、数十年経過したコンクリート建築の姿を伝えることで、今後の技術

デジタルアーカイブ として残す

発展のヒントになる点もあると思う。日本の文化としてモダニズム建築の功績を繋ぐためには、どのような現状を伝えていくべきだろうか。

私は個人としてもモダニズム建築の今として改修されていく風景や解体される建物の終焉を写しているが、依頼される撮影としていくつかの解体される建物のデジタルアーカイブの撮影にも関わっている。個々の団体や企業がそれぞれの状況で、設計時の図面の保存や当時の関係者のインタビュー資料などでデジタルアーカイブを作成していると思うが、それらのなかに解体時や改修時の映像記録も含めていく時期に来ていると思う。日本のモダニズム建築は、海外からも関心が高く情報も求められている。解体時の資料を国立近代建築資料館などにまとめて保存し、多くの人がアクセスしやすくしても良いと思う。一方

で、記録活動が民間団体や個人の努力で成り立っている場合もあり、クラウドファンディングなどを使って資金を調達しているものも見受けられる。そのような点が、映像記録があまり普及しない理由とも感じる。国や団体などからそれらの活動に対する助成金などの支援をし、支援を受けた者は作成した記録資料を提出することで、資料がまとまるのではないだろうか。また、映像記録は写真や動画以外にデジタルデータを駆使した3D点群データも主流になっており、様々なデジタル空間での利用も見込まれている。

昨年の夏、取り壊しが始まっているN.T.T日比谷ビルのアーカイブ作成のため、数回解体前の最後の記録撮影をさせていただいた。通信建築の力強い姿を写し込むことと共に長年建築物の要として使用されていたボイラー室や書庫などの最後の姿もライティングをして、六〇年間使われた建物の誇りと労をねぎらう気持ちで写らせていただいた。



東京オリンピックを機に建てられた日本武道館は、2019年、二度目のオリンピックを前に初めての大屋根葺替えも含めた大規模改修工事を行った。